

# 首都圏におけるグリーン・ツーリズムの適性地を探る

寺田明司\*

## 1 はじめに

近年日本の農山漁村（以下「農村」とする）をとりまく社会的・経済的環境は、過疎化・高齢化・後継者難・農産物の貿易自由化などにより、厳しい状況下にある。このままではわが国の農村が崩壊する危険性は、きわめて高いといわざるをえない。このような憂慮される状況を打開する必要がある。その一つとして、農村と都市が相互に補完しあい、共生して国土の均衡ある発展を図るため、農村地域を活性化するための具体的な方法が求められている。

1992年、農林水産省は都市と農村の交流を活発化する施策として、「グリーン・ツーリズム」を提唱した。グリーン・ツーリズムとは都市と農村の交流を図り、都市住民が緑豊かな農村地域で、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動であり、農村で楽しむゆとりある休暇のことである。

農林水産省だけでなく、建設省、自治省、通産省、運輸省、郵政省、文部省なども都市と農村の「人・物・情報」の交流に関する支援策を講じ、農村の活性化などに幅広い活動を行っている。

高度経済成長期以後、人々は物量的な満足感を達成すると、次には「質」を求めるようになった。このような時代の流れのなかで、都市住民と農村の関

係にも変化が生じ、都市住民は健康的で身体に安全な農産物を直接求めたり、余暇活動の一環として農業体験をしたり、緑豊かな農村で心の安らぎを求めようとする傾向も増えてきた。

一方、国内旅行も成熟期を迎え、従来の大規模な団体による宴会慰安型から、しっかりとした目的をもった、小グループによる旅行を中心とする多様化時代に突入した。その結果、農村も目的地の一つとして認識されるようになり、農村に長期滞在しその自然を探求したり、農作業を体験するという行動も現れてきた。まさに都市と農村の交流を図り、農村を活性化に導く新しい旅の形態であるグリーン・ツーリズムを展開する環境は整ってきたといえる。

農村では都市住民を受け入れる整備が必要であり、そのためには特にモデル地域を設定して、それらを効率的に運営していくことが、この運動を効率よく推進する上でも重要な課題である。

本研究は、首都圏におけるグリーン・ツーリズムのモデル地域を選定するために、その適性について諸条件を分析し、評価を行うことを目的としている。対象地域は島嶼部を除く東京都下と、埼玉県・千葉県・神奈川県とした。首都圏を対象としたのは、大都市東京の隣接地の農村地域であれば、手軽に行きやすくこのグリーン・ツーリズムの展開を推進して行く上で便利と考えたことによる。

[キーワード] 1 第一次産業が基盤 2 東京からの所要時間がカギ 3 四季を通しての季節性  
4 地域の発展性 5 多種類の宿泊施設

[keywords] 1 Primary Industries are the base 2 Transfer Time from Tokyo is a important factor  
3 Areas offering distinctive seasonal activities through the year  
4 Balancing the development of local economy  
5 Providing enough accommodation for all budgets

\* トラベルジャーナル旅行専門学校

## II グリーン・ツーリズムの特色

グリーン・ツーリズムの先進国はヨーロッパである。全旅行者の20%前後がグリーン・ツーリズムの愛好家として定着しているといわれる。彼らは数週間の長期にわたり、農村地域のB & B (Bed & Breakfast) や民宿に、夫婦または家族単位で滞在し、余暇を過ごしている。しかしわが国のグリーン・ツーリズムはまだ途についたばかりであり、旅行者が農村地域でゆったりと長期滞在するという経験もきわめて少ない。

グリーン・ツーリズムが1992年に行政レベルで登場してから3年が経過したが、このグリーン・ツーリズムは従来の観光地を中心とした、物見遊山的な旅行形態とは大きく異なる点がある。それはグリーン・ツーリズムが展開される場所が、有名な観光地ではなく、ごく普通の農村である点と、農村地域の活性化を目的としていることが大きな特色である。

そのため、旅行者を受け入れることを主目的に開発された従来の投資型の有名観光地とは異なり、その受け入れ地や旅行形態などでも次のような特色を有している。すなわち、①大規模な開発は行わず、地域資源を最大限に活用するもの。②心のふれあい等、人的交流面を重視するもの。③農村の自然環境や社会組織を破壊することなく、これらを育てるもの。④受け入れる農村側では地域住民が主体となり、地域づくりの一環となるもの。⑤農村地域に経済的な効果をもたらすもの。⑥利用者にとっては、低廉で長期滞在が可能なもの。

しかし、受け入れ側の農村の都市への情報発信システムも完備されておらず、都市市場との接点は必ずしも良好になっていない。わが国でグリーン・ツーリズムを体験する際の模範地はどこなのか、どこへ行けばグリーン・ツーリズムが体験できるのかという情報が不十分である。一方、受け入れる農村側

にしても、この新しい旅の形態に対する理解も浅く、都市住民を受け入れるための整備を進めたくても、どこが模範地であるかがわからないのが現状である。農林水産省の「農山漁村でゆとりある休暇を」の推進事業でも、それを展開させる適地、不適地に関係なく、市町村の意向を優先して「モデル整備構想策定事業」が実施されている。

現在、都市と農村の交流を通して農村地域の活性化を図ることは国の重要な施策であるといつてよい。その一つの方策として登場したグリーン・ツーリズムの受け入れ地を、都市住民が参加しやすい所へ早く整備し、国民への普及活動を展開することが望まれている。

## III グリーン・ツーリズムの適性地域の選定

### 1. グリーン・ツーリズムの舞台

前述のごとく、グリーン・ツーリズムの舞台は農村地域でなければならない。第1図は、1990年10月に実施した国勢調査に基づく産業別就業者数の第一次産業就業者率をランク分けして市町村別に示したものである。グリーン・ツーリズムの舞台は農村であるから、当然第一次産業の就業者がより多く定住している地域がその対象地になる。第1図にはその第一次産業就業率の分布を示したもので、今後この運動が展開する舞台となる可能性を持っている。1990年の第一次産業就業者の全国平均は7.1%である。

本研究の対象地域で、第一次産業就業率が全国平均の前後(6.0%以上)を占める市町村は、東京都下の32市町村中1村(3%)のみであり、埼玉県では92市町村中33(36%)、神奈川県は37市町村中4(11%)、千葉県では80市町村中63(79%)で県のほぼ全域がグリーン・ツーリズムの舞台となる可能性があり、埼玉領域では3分の1が、一方東京都・神奈川県ではほとんどが不適正地であることが明ら

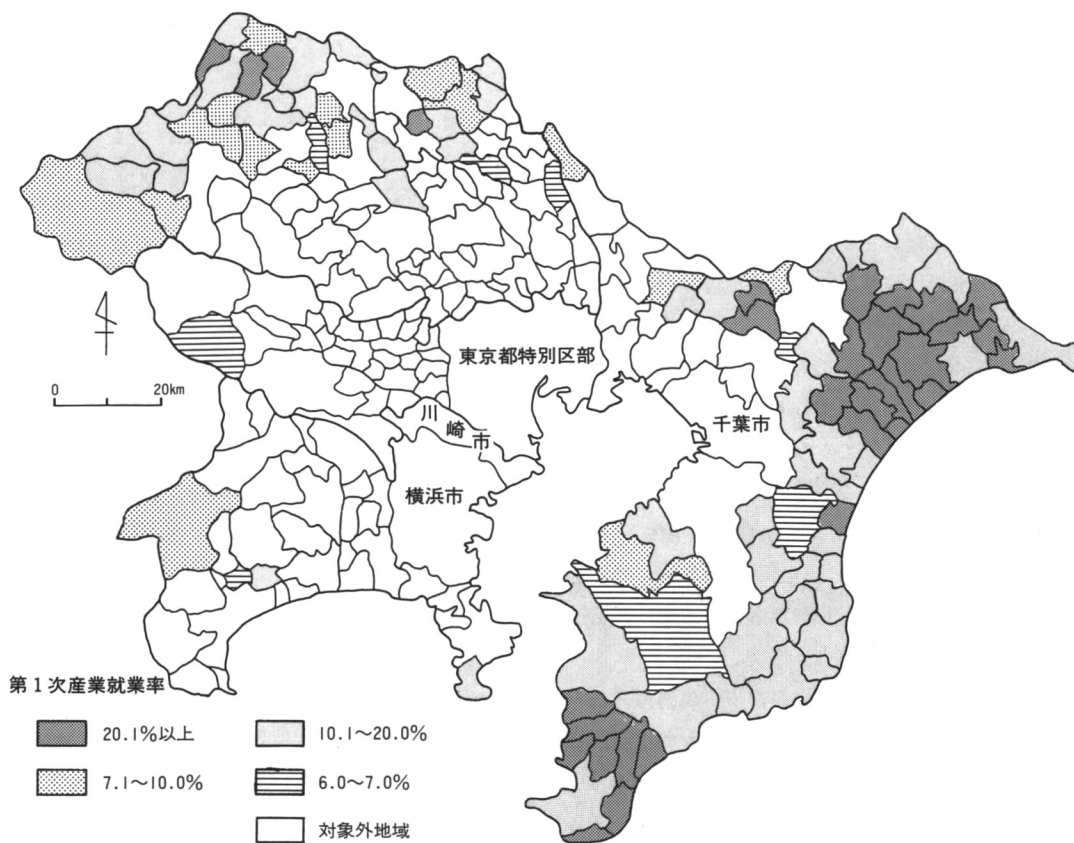
かである。また、この図より県境地域、半島地域が第一次産業就業率が高く、グリーン・ツーリズムの舞台となる可能性を秘めていることがわかる。

## 2. 適性地域のゾーン化

グリーン・ツーリズムの適性地域であっても、すべての自治体が同一水準にあるわけではなく、市町村ごとに差が生じるのはやむを得ない。また、環境整備や事業展開が各市町村で単独に行われたのでは非効率でもある。むしろ適性のある地域がまとまって整備や事業計画を展開する必要がある。そのためには、適性のある地域をゾーニングすることも重要である。

第1表は、前述の東京都下1、埼玉県33、神奈川県4、千葉県63の、あわせて101の市町村について、第一次産業就業率、自然環境が類似した複数の市町村を27地域にゾーン化し、その概要を記したものである。なお、松原村は東京都で唯一の第一次産業就業率が高い地域であること、大滝村（埼玉県）は隣接町村と異なり、林業従事者が多い地域であること、三浦市（神奈川県）は隣接地に類似の市町村がないことから、それぞれ単独の行政地域でゾーンを構成した。

第一次産業就業率は、各地域の第一次産業就業者数を地域全体の就業者数との比率で表したものである。その結果、単独構成の「奥多摩山地」以外は、



第1図 首都圏における第一次産業就業率（1990年）  
国勢調査により作成

全国平均の7.1%より高い比率を占めていることがわかり、各地域ともグリーン・ツーリズムの舞台としての可能性を秘めていることが明らかになった。

「地域の特徴」は、ゾーニングした地域全体がおかれている自然環境と、第一次産業就業者のなかでの農林漁業従事者の特色を表した。その結果、「大滝山林地」では林業従事者が、「南房勝浦」では漁業従事者が半数以上を占めており、残りの25のゾーンでは農業従事者が過半数を占めている。

「中心地」は、各ゾーンのなかで最も人口が集中している市町村である。人口集中地は首都圏から交通が便利であり、グリーン・ツーリズムの初期段階では交通の利便性は重要である。

### 3. 地域の現状

次に観光資源からみたグリーン・ツーリズムの適性地域の現状を、各地域について9種類の観光資源を指標として選び、それぞれを重要度別に4段階に区分したのが第2表である。

指標別のA・B・C・Dの段階表示は地域中の観光資源を各1点として、それぞれを4段階に重要度別に表示した。なお、この基礎資料は『全国観光情報ファイル 1990年度版』（㈱日本観光協会）を使用している。また、各「観光資源」の選択基準については、㈱日本観光協会の「基準表」を参考にした。

「宿泊施設」については、旅行の多様化時代であり、グリーン・ツーリズムの初期段階はいかに多くの階層の観光客を受け入れるかが重要である。そのため多種類の宿泊施設が地域内に存在するかが、成否に大きな要因となると考える。

「民宿収容人員」については、グリーン・ツーリズムの中心的宿泊施設は、農林漁業との兼業で営む民宿施設である。宿泊客へ農林漁業を指導できるうえに、他の施設と異なり地域社会へ溶け込みやすいシステムを有し、将来の長期滞在へ向けて料金も手ご

ろで、グリーン・ツーリズムを成功させる大きな要因と考え、その収容力を指標として採用した。

「季節性」については、グリーン・ツーリズムの特色が農村地域の自然と触れ合うことにあるならば、季節性は重要な指標である。その季節性は四季を通じていかに体験できることが重要と考え、“数量化”を試みた。

「変化性」については、前述の指標が四季別にいかに平均して分散されるかを数値化した。A：四季にわたり体験ができ、かつ平均の体験数が3シーズン以上のも。B：四季にわたり体験ができ、かつ地域内の平均の体験数が2シーズン以上で、数量のAランク中体験ができないシーズンが1シーズンあるもの。C：地域内の平均の体験数が1シーズン以上で、数量のBランク中体験ができないシーズンが1シーズンあるもの。D：数量のCランク中、体験ができないシーズンが1シーズンあるか、全く体験できないもの。

第2表から「地表景観」は、山岳の変化に富む大滝・秩父山地（北・東）と海に臨む千葉県の大半の地域と三浦半島が内地地により高得点を示している。また、「観光農牧漁」「郷土味覚」も千葉県が埼玉県下の地域より平均して高得点を示し、グリーン・ツーリズムの舞台として変化に富んでいることがわかる。都市住民を受け入れる「宿泊施設」も千葉県が多種類および軒数の多さを示している。特に千葉県の海岸地帯と利根川低地、秩父山地縁部（埼玉県）はAランクで現在も観光地として成立している地域である。「民宿収容人員」でも日本の民宿県といわれる千葉が高得点を示している。特に九十九里一帯と三浦半島（神奈川県）がAランクを示し、次に南房総一帯がAランク及びBランクの混合地域で、これもまた海岸地帯に集中している。埼玉県の大滝山林地、秩父山地北部、奥多摩地域（東京都）の山地ゾーンもBランクとなっているのが特色である。

第1表 グリーン・ツーリズム適性地域の概要(その1)

No.	地域の名称	所属市町村	所要時間	第一次産業就業率	地域の特色
①	大滝山林地(埼玉県)	大滝村	D	9.7%	2000m級の奥秩父の山々に囲まれた地域。 66%が林業従事者。
②	秩父山地北(埼玉県)	吉田町・小鹿野町 ・荒川村・両神村	D	11.5	1000m級の奥秩父の山々に囲まれた、秩父山地北部地域。 91%が農業従事者。
③	秩父山地東(埼玉県)	皆野町・ 神泉村・ 東秩父村	C	9.3	秩父山地東部を占め、中央を荒川が流れる地域。 94%が農業従事者。
④	秩父山地緑部(埼玉県)	長瀨町・美里町・ 寄居町・児玉町・ 神川町・上里町	B	14.2	秩父山地の東より北部にかけた山地縁で丘陵上にある。 99%が農業従事者。
⑤	埼玉中北部低地(埼玉県)	深谷市・本庄市・ 妻沼町・岡部町・ 南河原	A	14.9	北の利根川、南の荒川に挟まれた沖積低地。 99%が農業従事者。
⑥	埼玉中央丘陵地(I) (埼玉県)	滑川町・ 嵐山町・ 玉川村	B	7.7	県中央部の秩父山地東外縁部の丘陵地。 99%が農業従事者。
⑦	埼玉中央丘陵地(II) (埼玉県)	江南町・ 川本町・ 花園町	C	14.1	県中央部の秩父山地中北の外縁部の丘陵地。 99%が農業従事者。
⑧	埼玉北東低地(埼玉県)	加須市・羽生市・ 北川辺町・ 大利根町	A	10.2	利根川を挟む利根川沖積低地。 99%が農業従事者。
⑨	埼玉中東低地(埼玉県)	騎西町・川里町・ 白岡町・菖蒲町	A	13.5	利根川と荒川に挟まれた平坦な沖積低地。 100%が農業従事者。
⑩	埼玉中央低地(埼玉県)	吉見町・ 川島町・ 大里村	A	16.0	県中央部の荒川沖積低地。 100%が農業従事者。
⑪	印旛手賀沼(千葉県)	沼南町・印旛村・ 白井町・印西町・ 栄町・本埜村	A	11.9	印旛・手賀両沼と利根川の沖積低地と台地と変化に富む。 95%が農業従事者。
⑫	利根川水郷(千葉県)	佐原市・ 下総町・ 神崎町	D	15.1	利根川の沖積低地。県を代表する水郷地域。 99%が農業従事者。
⑬	利根川低地(千葉県)	銚子市・ 小見川町・ 東庄町	D	13.3	利根川河口の沖積低地と台地からなる地域。 85%が農業従事者。
⑭	下総台地北(千葉県)	大栄町・山田町・ 栗源町・多古町・ 千潟町・海上町	B	34.2	下総台地北縁部にあり全地域が高さ20~40mの平坦な台地上にあるが東部は低地となる。 100%が農業従事者。
⑮	下総台地中央(千葉県)	八街市 <sup>1)</sup> ・ 酒々井町・富里町・ 山武町・芝山町	A	18.7	全域が高さ40~50mの下総台地上にある。 100%が農業従事者。

第1表 グリーン・ツーリズム適性地域の概要(その2)

No.	地域の名称	所属市町村	所要時間	第一次産業就業率	地域の特色
⑯	九十九里北(千葉県)	八日市場市・旭市・飯岡町・光町・野栄町	D	22.3%	九十九里平野の北部にあり、下総台地外縁部と平野からなる。96%が農業従事者。
⑰	九十九里中央(千葉県)	東金市・九十九里町・成東町・蓮沼村・松尾町・横芝町	C	17.7	九十九里平野の中央部にあり、下総台地外縁部と平野からなる。98%が農業従事者。
⑱	九十九里南(千葉県)	大網白里町・一宮町・長生村町・白子町	A	15.8	九十九里平野の南部にあり、ほぼ全域が平野上にある。98%が農業従事者。
⑲	上総丘陵(千葉県)	茂原市・睦沢町・長柄町・長南町・大多喜町	A	8.9	房総半島中央部の標高200m前後の丘陵地とその外縁台地上にある。99%が農業従事者。
⑳	夷隅南房(千葉県)	夷隅町・大原町・岬町	C	13.3	東は70m前後の丘陵地。西は海に面する台地性地域。85%が農業従事者。
㉑	南房勝浦(千葉県)	勝浦市・御宿町・天津小湊町	D	13.7	150m前後の丘陵地を後背地とする海岸地域。57%が漁業従事者。42%が農業従事者。
㉒	内房総(千葉県)	木更津市・富津市・君津市・袖ヶ浦市 <sup>2)</sup>	A	9.2	上総丘陵を後背地にした東京湾に面する平野、海岸、平野、台地、丘陵と変化に富む。75%が農業従事者。
㉓	南房総内(千葉県)	館山市・富山町・富浦町・鋸南町・三芳町	D	18.4	東京湾に面し、標高100m～200mの丘陵地が迫る平野部の少ない地域。88%が農業従事者。
㉔	南房総外(千葉県)	鴨川市・白浜町・千倉町・丸山町・和田町	D	25.4	太平洋に面し、標高100m～200mの丘陵地が迫り平野部の少ない地域。黒潮の影響を受ける温暖の地。87%が農業従事者。
㉕	奥多摩山地(東京都)	檜原村	D	6.8	1000m前後の山々に囲まれ平坦地が少ない地域。58%が農業従事者、40%が林業従事者。
㉖	三浦半島(神奈川県)	三浦市	C	14.9	三浦半島の最南端にあり海と丘陵に囲まれている。68%が農業従事者、32%が漁業従事者。
㉗	神奈川西丘陵(神奈川県)	中井町・大井町・山北町	B	9.1	丹沢山地、渋沢丘陵、足柄平野と変化に富む地域。97%が農業従事者。

注：所属市町村のゴシック体で示した市町村は、当該地域(ゾーン)において中心となる市町村である。

所要時間は、首都圏・東京のターミナル駅(東京・品川・新宿・池袋・上野)のから各地域の中心地へ、列車を利用して最も早く到着できる時間を、またバス利用の場合は最寄り駅から中心地までの所要時間の合計タイムを算出し、分類した。

A：60分以内、B：75分以内、C：90分以内、D：91分以上

第一次産業就業率は1990年の国勢調査による。1)2)は1990年の行政資料にもとづく。

第2表 観光資源からみたグリーン・ツーリズム適性地域の現状

No	地域の名称	地表	公的	野外	観光	郷土	研修セ	・宿泊	民宿	季節性	
		景観	地域	コース	農牧	味覚	スポーツセ	施設	収容	人員	数量
①	大滝山林地(埼玉県)	A	D	A	B	B	D	C	B	C	B
②	秩父山地北(埼玉県)	A	A	A	A	A	B	B	B	A	B
③	秩父山地東(埼玉県)	B	B	A	A	B	B	B	C	A	B
④	秩父山地縁部(埼玉県)	C	B	A	A	A	B	A	C	A	B
⑤	埼玉中北部低地(埼玉県)	D	D	C	C	B	C	D	D	A	B
⑥	埼玉中央丘陵地(I)(埼玉県)	C	C	B	B	D	A	D	D	C	C
⑦	埼玉中央丘陵地(II)(埼玉県)	D	D	C	D	D	D	D	D	D	D
⑧	埼玉北東低地(埼玉県)	D	C	C	C	C	C	D	D	B	B
⑨	埼玉中東低地(埼玉県)	D	D	D	B	D	C	C	D	B	B
⑩	埼玉中央低地(埼玉県)	C	D	D	D	C	D	D	D	D	D
⑪	印旛手賀沼(千葉県)	C	D	B	B	C	D	C	D	B	C
⑫	利根川水郷(千葉県)	C	D	C	C	B	D	C	C	B	A
⑬	利根川低地(千葉県)	C	C	C	B	A	C	A	B	B	B
⑭	下総台地北(千葉県)	D	D	D	B	D	D	C	D	C	C
⑮	下総台地中央(千葉県)	D	D	C	C	C	D	C	D	C	B
⑯	九十九里北(千葉県)	B	D	C	B	C	D	A	A	C	C
⑰	九十九里中央(千葉県)	B	C	C	A	B	D	B	A	B	B
⑱	九十九里南(千葉県)	B	D	B	B	C	D	A	A	C	C
⑲	上総丘陵(千葉県)	C	A	B	A	C	A	C	D	B	D
⑳	夷隅南房(千葉県)	C	D	C	C	B	C	A	B	B	B
㉑	南房勝浦(千葉県)	B	D	B	B	B	C	A	A	C	C
㉒	内房総(千葉県)	B	C	A	A	A	C	A	B	A	A
㉓	南房総内(千葉県)	A	A	B	A	A	C	A	A	A	C
㉔	南房総外(千葉県)	A	B	B	C	A	C	A	B	B	C
㉕	奥多摩山地(東京都)	C	D	A	C	C	D	C	B	C	D
㉖	三浦半島(神奈川県)	B	D	B	C	C	D	B	A	B	B
㉗	神奈川西丘陵(神奈川県)	C	D	A	B	C	D	B	C	B	C

注：地表景観…山岳(登る山・見る山)、高原(湿原・原野も含む)、湖沼、河川景観(峡谷・滝など)、海岸景観(海岸部の景観的魅力ある地形・地域・島・砂丘・砂州・岬を含む)、海中公園(自然公園法で海中公園に指定されている地区)、海水浴場(公的機関・団体の指定するもので一定施設が有る、湖・川も含む)、A：15点以上、B：9点以上、C：3点以上、D：2点以下

公的のレク地域…公的観光レクリエーション(国・都道府県が主体で総合的な観光レクリエーション施設を整備した地域)、A：3点以上、B：2点、C：1点、D：0点

野外コース等…地方公共団体等が指定・推薦するサイクリング・ハイキングコース、自然研究路、オリエンテーリング・パーマネントコースなど、キャンプ場(管理者が明確で一定の施設あり)、A：10点以上、B：4点以上、C：1点以上、D：0点

観光農牧漁業…観光農林業、観光牧場(いわゆる〇〇狩りの対象となる農林業者で観光客に利用開放している牧場)、観光漁業(管理者が明確な釣り場で観光客に利用されている)、A：7点以上、B：3点以上、C：1点以上、D：0点

郷土味覚…郷土料理、特産物(味覚は観光的に魅力のある料理・特産物・味覚をいう)、A：9点以上、B：5点以上、C：1点以上、D：0点

研修セ・スポーツセ…研修センター、スポーツセンター(学校・会社等の研修利用のために設置、利用条件があるもの)、A：3点以上、B：2点以上、C：1点以上、D：0点

宿泊施設…国民宿舎(公営・民営とも)、国民休暇村、国民年金保養センター、青少年旅行村(ユースロッジを有するもの)、家族旅行村、ユースホテル(公営・民営とも)、簡易保険・郵便年金加入者ホーム、郵便貯金会館、大規模年金保養基地、労働福祉事業団体休養所、日本観光旅館連盟加盟旅館、全日本ビジネスホテル協会会員ホテル、日本ホテル協会会員ホテル、民宿、ペンション、A：4点以上、B：3点以上、C：1点以上、D：0点(異なる種類の宿泊施設を1点とする)

民宿収容人員…民宿の収容人員、A：3,001人以上、B：701人以上、C：1人以上、D：0人

季節性(数量)…行事、祭事、郷土芸能の各開催数、観光農牧漁業の体験出来る四季別の施設数、A：5点以上、B：3点以上、C：1点以上、D：0点

季節性(変化性)…本文参照。



一方、「公的レクリエーション」、「研修センター・スポーツセンター」などの普及率は埼玉県が高く、千葉県その他の地域は低い。また、「野外コース等」は埼玉県の大滝から秩父山地一帯と奥多摩山地、神奈川県西部丘陵の山地を有する地域がAランクを示している。

「季節性」については、埼玉県の中央丘陵と中央低地が数量・変化性ともに劣る以外は、全体的にバランスがとれている。総合的にみると、海岸と山地に広がる地域は高得点を示しているのに対し、台地・低地に広がる地域の得点は低くなっている。

#### 4. 地域の発展性

第3表は発展性からみたグリーン・ツーリズムの適性地域を表したものである。各地域が過去から現在までどのように変化してきたかをみるのは、将来どう発展、変化してゆくのかを、ある程度ではあるが予測できる重要な要素でもある。ここでは、第一次産業就業者、観光農牧漁業、民宿の収容人数の3指標をもとに、1980年から10年間の間にどう変化したかを数量化した。

第3表から「第一次就業者」については、埼玉県の全地域の減少率が高く、千葉県の半数と神奈川県の全地域の減少率が低いことが明らかである。特に埼玉県の大滝山林地、秩父山地北部・東部の秩父山地一帯での第一次就業者の減少が著しく、埼玉県中北部低地・中東低地の沖積低地帯は減少率が低い。

千葉県では、成田市周辺の下総台地一帯、九十九里北・中央、南房総内・外での第一次就業者の減少率が低いのに対し、上総丘陵・夷隅南房総の房総半島中央部一帯は減少率が高い。また、神奈川県の2地域は減少率が低いことが明らかである。

「観光農牧漁業」の推移は、埼玉県の大滝から秩父山地縁部の群馬県境との山地一帯での伸長率が高い。

また、埼玉県中東低地がAランクであるのに対し、

他の低地、丘陵地の伸長率が著しく低い。千葉県では印旛手賀沼から利根川低地の茨城県境一帯と、その隣接地・下総台地北の地域、九十九里南との隣接地・上総丘陵の一帯、南房勝浦、南房総内の房総半島の中央・南部地域の伸長率が著しく高い。また、東京都と神奈川県の3地域の伸長率が高いこ

第3表 発展性からみたグリーン・ツーリズム適性地域

No.	地域の名称	第一次就業者	観光農牧漁業	民宿収容人員
①	大滝山林地(埼玉県)	D	B	B
②	秩父山地北(埼玉県)	D	A	A
③	秩父山地東(埼玉県)	D	B	A
④	秩父山地縁部(埼玉県)	C	B	A
⑤	埼玉中北部低地(埼玉県)	A	C	D
⑥	埼玉中央丘陵地(I)(埼玉県)	D	D	D
⑦	埼玉中央丘陵地(II)(埼玉県)	C	D	D
⑧	埼玉北東低地(埼玉県)	C	D	D
⑨	埼玉中東低地(埼玉県)	B	A	D
⑩	埼玉中央低地(埼玉県)	C	D	D
⑪	印旛手賀沼(千葉県)	B	A	D
⑫	利根川水郷(千葉県)	D	A	A
⑬	利根川低地(千葉県)	C	A	D
⑭	下総台地北(千葉県)	B	A	D
⑮	下総台地中央(千葉県)	A*	D	D
⑯	九十九里北(千葉県)	B	D	A
⑰	九十九里中央(千葉県)	B	C	D
⑱	九十九里南(千葉県)	C	B	D
⑲	上総丘陵(千葉県)	D	A	D
⑳	夷隅南房(千葉県)	D	C	B
㉑	南房勝浦(千葉県)	C	A	C
㉒	内房総(千葉県)	C	C	D
㉓	南房総内(千葉県)	B	A	B
㉔	南房総外(千葉県)	B	D	B
㉕	奥多摩山地(東京都)	D	A	A
㉖	三浦半島(神奈川県)	A	A	A
㉗	神奈川西丘陵(神奈川県)	A	A	A

注：第一次就業者は1980/1990年の国勢調査に基づく第1次就業者の変化。全国指数は73。A：74以上、B：73以下、C：65以下、D：60以下

観光農牧漁業は1980/1990年の観光農牧漁業の営業数の変化。全地域の指数は169。A：130以上、B：101以上、C：100以上、D：99以下

民宿収容人員は1980/1990年の民宿収容人員の変化。全地域の指数は106。A：120以上、B：106以上、C：100以上、D：99以下



とが明らかである。

「民宿収容人員」では、埼玉県、東京都、神奈川県  
の各地域とも前述の「観光農牧漁業」の伸長率の度

合と一致した伸長率を示しているが、千葉県では利  
根川水郷以外の地域は逆に「観光農牧漁業」の伸長  
率とは反する現象を示しているのが明らかである。

第4表 グリーン・ツーリズム適性地域の総合評価表

No	地域の名称	所要時間	地域現状	宿泊施設	季節性	発展性	総合評価
①	大滝山林地(埼玉県)	D	B	C	B	C	要整備地域
②	秩父山地北(埼玉県)	D	A	B	A	A	最適地域
③	秩父山地東(埼玉県)	C	A	C	A	B	好適地域
④	秩父山地縁部(埼玉県)	B	A	B	A	A	最適地域
⑤	埼玉中北部低地(埼玉県)	A	C	D	A	B	好適地域
⑥	埼玉中央丘陵地(I)(埼玉県)	B	B	D	C	D	要整備地域
⑦	埼玉中央丘陵地(II)(埼玉県)	C	D	D	D	D	要整備地域
⑧	埼玉北東低地(埼玉県)	A	C	D	B	D	可能地域
⑨	埼玉中東低地(埼玉県)	A	D	D	B	B	可能地域
⑩	埼玉中央低地(埼玉県)	A	D	D	D	D	要整備地域
⑪	印旛手賀沼(千葉県)	A	C	D	B	B	適性地域
⑫	利根川水郷(千葉県)	D	C	C	A	A	適性地域
⑬	利根川低地(千葉県)	D	B	A	B	B	適性地域
⑭	下総台地北(千葉県)	B	D	D	C	B	要整備地域
⑮	下総台地中央(千葉県)	A	D	D	B	C	可能地域
⑯	九十九里北(千葉県)	D	C	A	C	B	可能地域
⑰	九十九里中央(千葉県)	C	B	A	B	C	適性地域
⑱	九十九里南(千葉県)	A	C	A	C	C	好適地域
⑲	上総丘陵(千葉県)	A	A	D	C	C	適性地域
⑳	夷隅南房(千葉県)	C	C	A	B	C	適性地域
㉑	南房勝浦(千葉県)	D	B	A	C	B	適性地域
㉒	内房総(千葉県)	A	A	A	A	C	最適地域
㉓	南房総内(千葉県)	D	A	A	B	A	最適地域
㉔	南房総外(千葉県)	D	B	A	B	C	適性地域
㉕	奥多摩山地(東京都)	D	C	C	C	A	可能地域
㉖	三浦半島(神奈川県)	C	C	A	B	A	好適地域
㉗	神奈川西丘陵(神奈川県)	B	C	C	B	A	適性地域

注：所要時間…第1表の首都圏からの所要時間をそのまま使用した。

地域の現状…第2表の6指標(地表景観、公的レクリエーション地域、野外コース等、観光農牧漁業、郷土味覚、研修センター・スポーツセンター)の総合点を4段階に評価した。A：45点以上、B：35点以上、C：25点以上、D：24点以下。全地域の平均は34.9点である。

宿泊施設…第2表の2指標(宿泊施設、民宿収容人員)の総合点を4段階に評価した。A：17点以上、B：13点以上、C：9点以上、D：8点以下。全地域の平均は12.5点である。

季節性…第2表の2指標(季節性の「数量」と「変化性」)の総合点を4段階に評価した。A：16点以上、B：12点以上、C：8点以上、D：7点以下。全地域の平均は12.4点である。

発展性…第3表の3指標(第一次就業者、観光農牧漁業、民宿収容人員)の1980年から1990年までの10年間の推移を4段階に評価した。A：21点以上、B：18点以上、C：13点以上、D：12点以下。全地域の平均は18.4点である。

「地域現状」「宿泊施設」「季節性」「発展性」の計算にあたっては、Aを10点、Bを7点、Cを5点、Dを3点とし、各々を加算して算出した。

「総合評価」の5段階評価にあっても、Aを10点、Bを7点、Cを5点、Dを3点とし、各指標を加算して算出した。全地域の平均は32.2点である。

## 5. 総合評価の指標

前述の各調査内容をまとめて、5つの指標で各地域のグリーン・ツーリズムの舞台としての、将来の適性を考察したのが第4表である。各指標の説明と4段階の配点基準については表下に記す。

- ①所要時間…この新しい旅行形態が広く都市住民に好まれるためには、いつでも手軽に行ける利便性は欠かせない。その点で所要時間は重要な指標の一つとなる。
- ②地域の現状…観光資源からみた現状の姿は地域を把握するための基本的な指標である。
- ③宿泊施設…宿泊施設と民宿の収容人数はツーリズムの基地の状況を表す重要な要因であるため、はず

せない指標である。

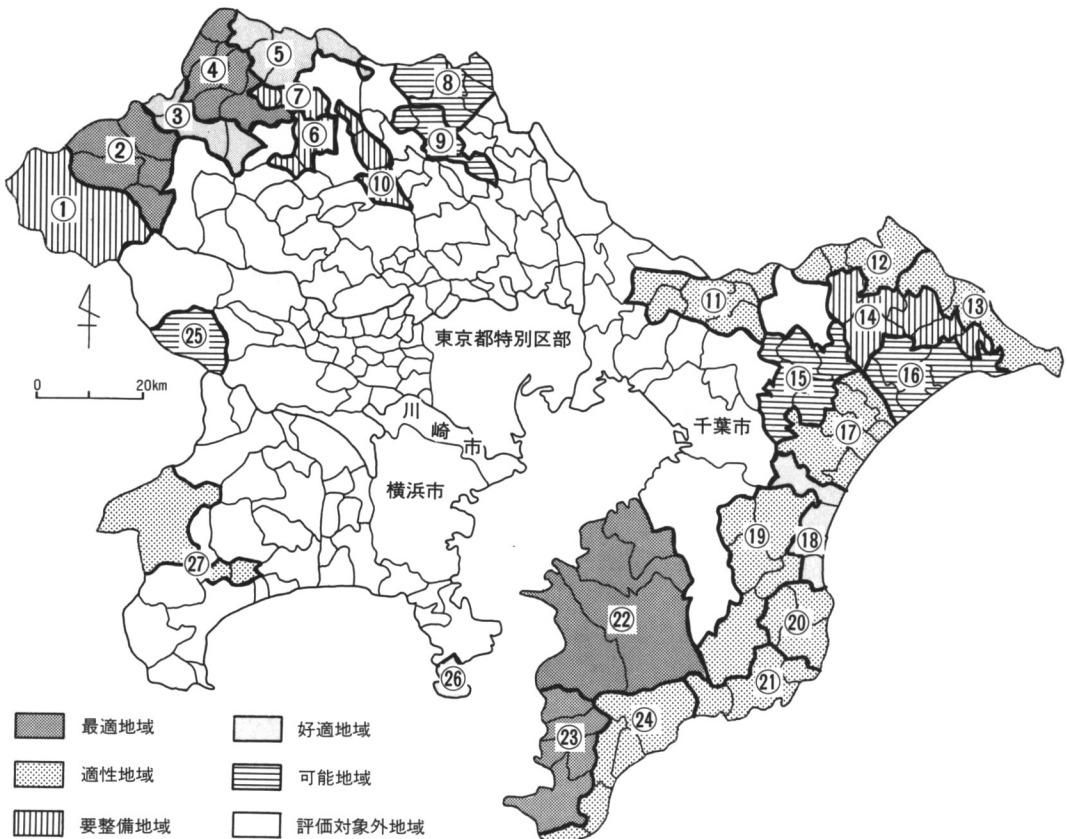
④季節性…グリーン・ツーリズムは、自然を観光資源の中核とするだけに、わが国の風土上季節性は重要である。

⑤発展性…今後のゾーン形成の行方をはかる重要な指標である。

## IV グリーン・ツーリズムの適性地域

### 1. 適性地域の総合評価

前述の指標とそれらの分析結果により、グリーン・ツーリズムの適性のある地域について総合評価を行った。それらを示したのが第4表の総合評価欄



第2図 首都圏におけるグリーン・ツーリズムの適性地—総合評価図—

である。総合評価は、次に示す5段階に区分した。

①最適地域(40点以上)…総合的に地域内の条件が高度に揃っていて、グリーン・ツーリズムのモデル地域としてもっとも適した地域。「内房総」は全地域が都市機能を備えた地域であるが、「南房総内」とともに自然の変化が海岸、平野、台地、丘陵と変化に富んでいる。また、埼玉県も地域の現状がAランクにあり、観光資源に恵まれていることが評価できる。また季節性、発展性とともによく優れているのが共通点である。

②好適地域(35点以上)…最適地域に準ずるもので、モデル地域の予備軍であるといつてよい。この地域の共通点は、季節性と発展性が高い点である。

③適性地域(32点以上)…今後の努力次第で、モデル地域に発展できる要素をもっている地域である。この地域の共通点は、千葉県に偏在している点と季節性に恵まれているのが特色である。

④可能地域(28点以上)…今後かなり努力をしなければグリーン・ツーリズムの受入れの可能性がでてこない地域である。この地域の共通点は、季節性が中程度であることである。

⑤要整備地域(27点以下)…グリーン・ツーリズムに関して条件が揃わず、かなりの時間と努力が必要とされる地域である。この地域の共通点は、宿泊施設の得点が低いことである。

## 2. グリーン・ツーリズムの適性地域と地域特性

5段階に区分した総合評価に基づいて、それらを図に表したのが第2図である。適性の高い地域は埼玉県北部から北西部にかけての地域と、千葉県の房総半島の内側に地域が連続しており、神奈川県の一部にもみられる。もっとも高い評価を得た最適地域に該当するのは埼玉県秩父山地北部の小鹿野町と秩父山地縁部の寄居町を含む地域で、その両隣接地の皆野町、深谷市にかけてこれに準ずる地域が連なっている。

千葉県では、東京湾に面している木更津市を中心とする地域とその南の隣接地、鋸南町から館山市に連なる市町村が、最適地域として位置し、現在でもこの地域は観光・レクリエーション地域として、東京大都市圏からの観光客を集めている。一方、外房地域では大網白里町を中心に好適地域があり、そこから北に東金市、西に茂原市・大多喜町を含む地域、南に大原町・勝浦市・鴨川市にいたる地域が適性地域として連続している。千葉県内ではこのほかに印西市を中心として適正地域があり、そこから東に佐原市・銚子市を含む一帯が利根川に沿って適性地域として展開している。

都市化の進んだ神奈川県では可能性のある地域はきわめて限られているが、そのなかで三浦半島南端の三浦市は好適地域であり、丹沢山地に近接する西部の山北町と大井町・中井町が適正地域である。

首都圏においてグリーン・ツーリズムの可能性が高い地域は、ほぼ東京都の区部を中心とした同心円上にあり、山地・丘陵を主体とする地域と海岸部に位置する地域からなっている。これに一部河川(利根川)に沿う低地部が加わっているとみてよい。グリーン・ツーリズム事業を導入し、推進するにあたっては、ゾーンごとの地域特性を配慮した基本的理念を確立し、よりよい方向性を打ち出すことが望まれる。

## V おわりに

グリーン・ツーリズムということばが、最近よくマスコミなどに登場するようになった。しかしこの新しいツーリズムとは何なのか。また、どこへ行けば体験できるのかといったことなどについては、その内容はまだ十分知られるまでにはいたっていない。参加しようとする都市住民(旅行者)も、受け入れる農村側もこの点は共通である。本稿は、今後クローズアップされるであろうこの新しい旅行形態

が展開されるにあたっての可能性について、首都圏について予察したものである。指標の選択やそのランク付けに、客観性を欠く面があったことは承知しているが、とくにグリーン・ツーリズムという目標に絞って判断する場合には、この方法も一考に値するものとして試みてみた。また、基礎データを国勢調査と全国観光情報ファイルだけに絞ったのは、1980年と10年後の1990年の比較に統一性をもたせるためである。しかし、全国観光情報ファイルも各都道府県の調査に依頼しての情報であるだけに、調査基準などの徹底さに欠けている点も否めない。今後は資料の適格性についても十分配慮したい。

農村の活性化を目的として、都市と農村との交流を活発にする試みとして登場したグリーン・ツーリズムは、先進国ヨーロッパでは定着し、各種の施策

が実施されている。また、余暇時間の取得が日本とは全く異なるので、ヨーロッパなみにわが国にこのツーリズムを定着させるにはまだ解決すべき問題も多い。政府、企業、大衆にも理解が必要である。しかし、日本における国民の生活も質や個性化を求める時代へと変化してきており、いろいろな点で都市住民が農村に関心をもつようになったことは事実である。グリーン・ツーリズムが旅の一つの形態として、日本でも本格的になるまでには、それほど時間はかからないと思われる。それゆえに、諸条件の整備が急がれるのである。

本報告は、立正地理学会の研究委員会として設立された「地域の活性化委員会」の助成を受けたものである。

(1996年6月7日 受付)

(1996年7月9日 受理)

---

#### 参考文献

- 1) 寺田明司(1994)：農山漁村方リゾート時代を迎えて観光資源の考え方—都市と農村の交流の現状から—，地域研究，34-2，40～47.
- 2) 寺田明司(1995)：最近の観光業界の流れ，ラテラネットワーク.
- 3) 総理府統計局(1980)：『全国都道府県市区町村別人口および世帯』総理府.
- 4) 総理府統計局(1990)：『全国都道府県市区町村別人口および世帯』総理府.
- 5) 自治省行政局振興課(1994)：『全国市町村要覧』第一法規出版.
- 6) ㈱日本観光協会(1980)：『全国観光情報ファイル 1980年度版』㈱日本観光協会.
- 7) ㈱日本観光協会(1990)：『全国観光情報ファイル 1990年度版』㈱日本観光協会.